

エゼキエル書 33：7～9， 11 われらは神の見張人 7月11日

1. エゼキエル書は、預言書とか黙示文学と言われています。エゼキエルは、バビロンに捕囚として連れていかれた人で祭司だとされています。神がイスラエルの民をなぜ、捕囚民としたのか、悔い改め立ち返れば、再建されると、輝かしい未来を語り、捕囚民に希望を語っている書です。
2. 見張人とは、戦国時代に砦（とりで）のやぐらに昇り敵の動きを見張り、警告する人を思い浮かべます。東北の震災の時、消防の方が、火の見やぐらに昇り人々に避難するよう警告をし続けて亡くなった方がいました。見張人の働きです。本日の聖書箇所という見張人とは目の前に横たわる危険に対して民を継続的に見張り警告する人と言えます。危険とは主の言葉に従わないことによる裁きのことです。
3. 本日の聖書の箇所は、3つのことを述べています。第1に、7節で主があなたをイスラエルの家の見張人にしたとあります。あなたとは、主から選ばれた人、信仰者のこと、すなわち私たちのことでもあります。イスラエルの家とは、全世界の人々と言ってもいいでしょう。見張人の役割は、「私の口から言葉を聞いたなら、わたしの警告を人々に伝えよ」ということです。私たちが神のことばを聞いたなら、それを人に伝えなさいということ。聞くとは文字通り聞くことであり、聖書から聞くことでもあります。イエスさまが、十字架の死から復活した時、弟子たちに向かって「全世界に行ってすべて造られたものに福音を述べ伝えよ（マルコ16：15）」と、自分から聞いたことを述べ伝えよと言っています。また、エルサレムでステパノが殉教したあと、迫害が起こり、使徒たち以外の弟子たちは各地に散り、み言葉の福音を伝えながら巡りあるいた（使徒8：4）とあります。イエスさまは、福音を聞いた弟子たちに、人に伝えることを命じ期待しているのです。伝えるとは、文字通り言葉で伝える、文書で伝える、生活態度で伝える等いろいろの仕方があると思います。私たちは、神さまの期待にそっているのでしょうか。説教を聴いて今日は恵まれたとか、いい言葉をきいたなどと自己満足していないのでしょうか。聞いたこと、見たことを人と分かち合うことが期待されているのです。
4. 聞いたことを伝えるという点で、仕事していた時、欧米人について感じていたことが思い出されます。欧米と日本のビジネスマンの違いです。欧米人は聞いたこと、見たこと感じたことを必ず文書にして上司に報告するのです。交渉事や話し合いが終わると彼らはすぐに文書にして報告していました。神から聞いたことを伝えるだけでなく、聞いたこと、見たこと、感じたことを人に伝える習慣がビジネス、生活の場でも身につけているのです。また、会議や交渉等で、別れるときの挨拶でG O D B L E S S Y O Uとささやいていく人と多く出会いました。福音の伝え方の一つですね。聖書的なのです。日本のビジネスマンの多くは報告を、電話で済ませたり、口頭で報告したりで、文書にすることはなかなかしないのではと思います。

さらに、戦国時代の1549年に来日し、はじめてキリスト教を日本につたえた、宣教師のフランシスコザビエルとか、その後に来日し生涯日本に滞在したルイスフロイスのことも思い浮かべます。彼らは聞いたこと、見たことを手紙や報告書という形でバチカンや海外にいる上司に報告しているのです。膨大な量のものが、翻訳され戦国時代の最大の資料になっています。特に、ルイスフロイスは、約30年間、日本に滞在し、日本語も達者だったこともあり、信長、秀吉、光秀等の人物評価や、その時代の生活状況や宗教事情を、大冊の「日本史」という書物に書いています。それらにより日本の戦国時代の様子がよくわかるようになったということで、日本の歴史研究の第1級

の資料になっています。この個所の教えが、日常の生活習慣にも定着していることがわかります。

5. さて、2点目は、8~9節で、今まで述べてきたことをさらに一步進めています。悪人に向かって、主が「お前は必ず死ぬ」というとき、「あなたは悪人に警告しその道から離れるように語れ、語っても警告を聞き入れないなら、その責任はお前にはなく悪人にある。しかし、あなたが悪人に警告しないならその責をあなたに問う」と。

6. ドイツのナチス政権時代にヒトラーに抵抗したいわゆる、教会闘争のリーダーのひとりにニーメラーという人がいました。私の大学時代の教授がよく紹介している話です。

1934年の初めにニーメラーは、ヒトラーのところに抗議するために行ったそうです。1時間ほどヒトラーとニーメラーは激しい論争をしたそうです。ヒトラーはニーメラーの忠告に耳を貸さず、怒って彼を国家反逆罪で牢屋へ送ります。1945年5月にナチスが降伏し、ニーメラーは解放されます。その年の6月~7月にかけてかれは同じ夢を何回か見たそうです。それはこんな夢だったそうです。「わたしは白雲から発するまぶしいばかりの明るい光をじっと見つめていた。光と共に一つの声が響いてくる。その声はこう尋ねている。「お前は何か申し開きすることがあるのか」と、そしてそれに答えている声を聴いたとき、私は仰天した。「はい。私には、かつて何人も福音を語ってはくれませんでした」と答えるその声は、ヒトラーだったからです。雲間から聞こえてくる次の声が、私に向かって「お前は、なぜ、この男に福音を語らなかったのか。お前は、かつてたっぷり1時間もこの男と一緒にいて、口論し、罵倒しあったではないか。それなのに、お前はこの男に福音をつげはしなかったのだ」と。この夢を通して彼は、自分も又ナチスの成立と支配の全過程に対して共同責任があることを自覚せざるを得なかった。そしてその後、ドイツの教会は罪責宣言をすることになるのです。まさに、この個所の通りですね。

7. 最後に、11節で神の望むことは、すべての人が、立ち返り悔い改めることである。すべての人を救いたいのだと言っているのです。悔い改めればすべての過ちを思い起こさないとまで言っています。イエスキリスト、すべての人の罪の贖いのために十字架につかれました。私たちは、それを恵みとして受けるだけでいいのです。私たちは、このキリストの見張人として、主の期待に応え、聞いたことみたことの福音を伝えようではありませんか。